

句集

流氷

奥村  
ともえ



## 序

能勢の俳句グループに奥村ともえさんがいらっしやることを知ったのは七年ほど前に、ウェブサイト「ゴスペル俳句」のインターネット句会を再開した頃である。

精勤に投句を続けられ、みのる選に入選された作品がある程度溜まっていたので節目として句集に纏められることをお薦めした。ご家族との旅行をなによりも楽しみとされていたようで、その訪問先で詠まれたと思われる佳句が多く散見できる。

初旅の温泉に四肢のばす至福かな

旅立ちの鞆に庭の青みかん

眼福や食べるに惜しき夏料理

作品の特徴は、高齢者にありがちな構えたところがなくじつに平明なのである。

お菓子づくりが得意な彼女は、私が能勢を訪ねるときにはいつも手作りの好物でもてなしてください。人を喜ばせることがまたともえさん自身の喜びともなるのである。そのような優しさによって培われた俳句眼は、何気なく気づかないような情景までもが見えてきて佳句となるのである。

鯛焼きを食ぶ私らは尻尾から

遠足のリュックにゆるる守り札

みちのくの林檎と見たる木箱かな

これらはみな懐かしい昭和の味が色濃く滲みでた秀作で見習うべき良きお手本である。

よい俳句を詠むためには人格を陶冶することだと先師から教わった。そのためには愛の心をもって互いに切磋琢磨せねばならない。能勢はそのためのよき自然環境と人間関係に恵まれている。ともえさんも又その和合の中にあって長生きをし後人の活躍のために祈りつづけてほしいと切に願います。

平成三〇年五月吉日

やまだみのる



每日句會入選句

牡蠣焼けば殻の中にて身のをどる

陽のあたる此処極楽と日向ぼこ

うなじふと打たれし気配初時雨



秋晴や雨の予報をくつがへし

峡の日のつるべ落ちしや露天風呂

新米や先ずは離れて暮らす子へ

思  
い  
人  
待  
つ  
や  
に  
月  
の  
出  
を  
待  
ち  
ぬ

香  
り  
立  
つ  
島  
の  
レ  
モ  
ン  
は  
濃  
き  
緑

秋  
日  
影  
水  
面  
に  
ゆ  
ら  
ぐ  
金  
閣  
寺

塗下駄の音揃ひたる阿波踊

身をそらし水面をつつく川蜻蛉

花火師の印半纏躍如たり

散紅葉絨毯模様なせりけり

山頭火偲べと句碑に時雨けり

地団駄を踏んで確かむみなし栗

ゆく吾に辞儀する風の芒かな

穂薄をのけぞらし過ぐ列車かな

秋冷の風に里山黄変す

と見かう見して揺れかはす秋桜

おしくらのごと鈴なりの葡萄かな

遠花火スローモーション見る如く

裏側へ回る道あり滝涼し

烏賊船の灯の煌々と明易し

花火師ら黒子めきたる中洲かな

風鈴の舌巻き上がる暑さかな

月光にくさぐさ濡るる里路かな

夕立あと一人二人と軒離る



ラムネ飲むカランコロソと玉鳴らし

夕立を避ける軒なくビルばかり

薬指小指を立てて枇杷を剥く

よき日陰つくり葉桜広がりぬ

セル着れば肩の荷おりし如軽し

風の意に従ひ芽吹く柳かな

菓子口に新茶をふふむ至福かな

幼な顔並びし都をどりかな

早蕨の拳を翳すなぞへかな

深山道明るうしたる山桜

枝揺れて囀りを降りこぼしけり

飛騨川の中州に残る春の雪

春めくや鰈の腹子ほのと透け

うすらひの流離ひそめし亭午かな

二歩三歩して凍鶴となりけり

寒の水飲みて長寿を祈りけり

初恵比寿外人さんの屋台店

飛び立てば数の多さや稲雀

牡蠣割女無心に牡蠣の山崩す

初春や小さき漁船も大漁旗

駆け足で買物すます大晦日

山茶花の日々咲きつぎてかつ散りぬ

筋雲の帯のごとくに寒夕焼

黄落の中より現るる一両車



先客につられて買ひしにごり酒

ポケットの手がもてあそぶ木の実かな

松手入して蒼天の開けたり

鯛焼きを食ぶ私らは尻尾から

城濠に相打ち倒れ枯蓮

子かまきり米粒ほどの鎌をふる

白芙蓉ほのと紅さす午後三時

手を離れ流燈波にのりそめし

夏草の長けて川面を隠しけり

栗の花匂ふ能勢路の峠かな

苔庭を褥に沙羅の花白し

朝顔の双葉の鉢を抱く童

梅雨晴間待つてましたと鳥語満つ

鯉のぼり降ろせば残る陽のぬくみ

朝堀りと札笥の宅急便

遠足のリュツクにゆるる守り札

雪解川中洲に未だ雪残る

もみ殻を貫き芽吹く名草の芽

残り鴨まばらとなりて湖広し

雛の灯の洩るるステンドグラスかな

白魚のざるを覗けば黒目のみ

白魚の煮立てばかなくぎ姿なる

浅蜷貝生きてをるぞと舌を出し

バス曲り白面の富士現るる



水仙のなだれ咲く道登り行く

藁苞の暗きに灰と寒牡丹

粕汁に頬を染めゐる好好爺

初御空白鷺城のいや白し

焼牡蠣の食べ頃と泡ふきにけり

おでん屋の鍋蓋とればわつと湯気

泳ぎ来る白鳥の水脈乱れざる

よす波に打ち上げられし枯葉嵩

紅葉茶屋冷えを遅しと託ちけり

苑粧ふ桜紅葉を魁に

一陣の風に大袈裟芒原

秋深し卒寿の母と有馬の湯

金木犀一夜の風に無一物

すすきの穂こうべを立てて風いなす

薄雲に浮きつ沈みつ十三夜

ポストまで行かねばならぬ台風裡

豪快にビールを干せる女かな

日傘輪をなしてぺちやくちや立ち話

恋 虫 纏 れ つ つ 消 ゆ 樹 間 かな

昏 れ て な ほ ひ と き は 白 き 藻 花 かな

あ ふ れ 咲 く 柚 に 成 り 年 確 信 す

余花咲いて立山いまだ峰白し

花菜畑遍路の傘の見え隠れ

暮れて威を得たる火の粉や花篝



振り返りては夜桜の辞しがたし

序破急と気まぐれに舞ふ春の雪

園に愛づ梅は朧に昏れなんと

嫁ぎたる娘より届きし愛のチヨコ

うすらひの揺らぎて岸を離れけり

飛び翔ちし鴨また陣へ戻りけり

海光のいま届きたる水仙郷

山茶花の花に雪積む今朝の庭

初旅の温泉に四肢のばす至福かな

御手洗の杓真新し初詣

海の風水仙郷を吹き上げ来

紅葉溪大吊り橋の揺れにゆれ

大吊橋足下は深き紅葉谷

時雨傘広げれば日の射しにけり

雑木山グラデーションに粧ひぬ

万華鏡めくとりどりの散紅葉

玉の目を弾きて軒の柿すだれ

秋嶺を越えて十津川村を訪ふ

枯蠟螂合掌のごと身じろがず

崩れ築千切れし旗の傾きぬ

旅立ちの鞆に庭の青みかん

定置網一湾覆ふ良夜かな

絶景の嶺々と見る間に霧の海

烏賊舟の不夜城なせる魚港かな



長き竿燕返しに鮎を釣る

つぎつぎと三日月過ぎる雲早し

夕焼け背に巨人めく我が影法師

ころころと玉あそばせてラムネ飲む

豪族の墓供花も無く梅雨寒し

蛍火のネオンの如くまたたきぬ

石畳割れ目に立ちし花すみれ

新しき青竹組まれ上り築

まろびては駈ける子犬や土手のどか

杉山のヴェールとなりしまだら雪

笠連ねあぜ道をゆく春遍路

春風や干魚吊す蟹の家

駈け来たる肩に残りし春の雪

夢殿の参道綴るしだれ梅

焼山を見よ万葉の火が走る

がうがうと音立てて山焼かれけり

初天神祈願の絵馬の鈴生りに

訪ねたる山家馳走は猪の鍋

寒夕焼見よと傾くバスの窓

大いなる鯛ささげ持つ福娘

相寄れば酒の品評家の春

枯蓮田三角定規並ぶごと

毎日の薬絶やさず去年今年

膝ついて藁苞覗く寒ぼたん



東の間の心温む寒夕焼

おでん屋の湯気機嫌良く上がりをり

冬凧の小樽の海を睥睨す

駈けてゆく音のかそけき風落葉

客寄せの幟色あせ崩れ築

貼り絵めく雨の舗道の散紅葉

かすかなる奈落の瀬音紅葉狩

うなじふと冷たき気配時雨来る

庭手入れ小春日和に恵まれて

暗き庭なれど一隅石露明かり

喬木の裾を火に染む蔦紅葉

北の宿椀に溢るる芋煮かな

踏むまじと汝の後行く草紅葉

川の岸余地なく鯨釣り人並ぶ

初咲きの菊仏前に手向けけり

これこそは故郷の味むかご飯

殉教の墓訪ふ畦の彼岸花

朝まだきより鳥語燦台風過

抱き起こし出水汚れの稲を刈る

月の出を誘なふごとく雲迅し

老い吾もラジオ体操朝涼し

カメラマン腹ばひて撮る小鬼百合

手の温み残る流灯海へ押す

余力あり路上の蟬の飛び行けり



眼福や食べるに惜しき夏料理

麦茶飲む切子硝子の藍の色

里山も揺らげとばかり青嵐

店先の干し蛸風に回りけり

亦一つ音なく落ちし沙羅の花

風意地悪大噴水を乱しけり

天地人なして噴水あがりけり

燕の巢頭上注意の札立てて

つんつんと植田に尖る苗の先

鶯の正調雨に途切れがち

お茶処なれや畑に幟立つ

人垣にのぞくからくり春祭

白雲のごと中腹の山桜

揺さぶれば音のでさうな花馬酔木

自転車の少し大きめ山笑ふ

人住まぬ朽ち家に梅の香りけり

春潮に洗はれて立つ朱の鳥居

落ち合ひてより高鳴るや春の川

四つの足跡はつきりと雪の果

雪解水高鳴る峽の疎水かな

今朝晴れて流水の沖一変す

枝絡む日に蠟梅の匂ひけり

炉の炭のはじけて後は機嫌よし

摘みたしやリフトの下のふきのたう



受験子の絵馬に紛れし恋の絵馬

うぐひす餅尾頭見分けつきがたし

震災の海に育ちし牡蛎届く

とんど燃ゆ四囲の山々未だ醒めず

太鼓高鳴りて佳境やとんどの火

恙無き余生を謝して初詣

みちのくの林檎と見たる木箱かな

紛れなき逆さ金閣池冴ゆる

藁苞の奥に小さき寒牡丹

牡蛎船の  
と行きかく  
行く中の  
島

宿坊の積もる  
落葉も風情とす

覚え無き  
万両庭の  
あちこちに

湯のたぎる音のみ聞ゆ夜なべかな

枯れ色の混じるも侘びや冬紅葉

玉の日に斯く美しき冬紅葉

こうのとりにすくと降り立つ冬田かな

所在なさげにさまよへる冬の蝶

枯蠟螂向きあへば未だ鬪志見ゆ

老幹を搦めてのぼる  
蔦紅葉

乱れ髪振るごと風  
の枯れ芒

綿菓子のごとく膨れる  
秋の雲

吾に媚ぶかに近づき来秋の蝶

ふむまじと爪立ち歩む草紅葉

噴煙を眺めの風呂や秋高し



風通ふたび木犀のにほひけり

夕日いま沈む刹那や銀薄

一筋の月の光路に波をどる

野路行けばみほとりに増ゆとんぼかな

昨夜の雨晴れて頬なづ風は秋

見つめゐて何も起こらず蟻地獄

鷺草の窓辺に置けば風生まる

小休止する間のありて蝉時雨

田に遊ぶ鴨の植田をゆらしけり

どよめきと共に竿灯立ち上がる

青田波越後山形米どころ

岩肌をさばしる水の楽涼し

またたびの白のなだれて山深し

手に掬ふ山の香まじる蔵王の湯

と見る間に葉裏に紛れかたつむり



吟行句会入選句

高稲架に傾く谷戸の夕日かな

明治の香残る校舎や里の秋

夢比べてふ花ダリア競ひ咲く



北限の椎の杜とや村祭り

朝風呂の至福や旅の髪洗ふ

鮎や鱧贅を尽くせり宿の膳

螢火のまたたきみたる闇深し

里山をおほい尽くして栗の花

陸の鴨機嫌の腰を振りにけり



## あとがき

能勢グループのみなさまの励ましと支えに甘えて、この年になるまで楽しく俳句を続けてくることができました。

みのるさんの添削を得てコツコツとためた作品ばかりですが、お薦めを頂いて思いがけず句集として纏めることができました。素晴らしい宝物をプレゼントされた気分です。何よりも子供や孫たちに見てもらえることが嬉しく感謝の言葉もあります。

ウェブサイト『ゴスペル俳句』との不思議なご縁で、おぼつかないながらもパソコンに触れインターネット句会に参加できますこともまた日々の励みです。グループの中では最長老の私ですが、命ある限り俳句ライフを全うしたいと切に願っています。

最後になりましたが、身に余る序文を賜り句集についてご指導とご労をいただいた、やまだみのるさま、何かと助言いただきお手伝いしてくださった能勢の句友の皆さまのご厚意に心から厚くお礼申し上げます。

平成三〇年六月吉日

奥村 ともえ



『流水』 奥村ともえ

平成三〇年七月一五日 印刷

平成三〇年七月一五日 発行